

雪嶺集

〈宮坂静生鑑〉

顛末

小林 貴子



蓮の実のとんで網膜剥離かな
凧や奈落見えたる目の手術
霜の夜や一呻きして手術終へ
デスペアの形に眠る冬の星
遣る瀬なき思ひ布団にあたりけり
遠近感なくてさすらふ冬の芝
働いてゐる人羨し臘八会
綿虫や会ひたき人を指折りて
眼帯はどくろの形クリスマス
退院後リユートなど弾き春呼ばん

ロダンの忌

佐藤 映二

七五三 飴職人の脇見せず
蕎麦刈られ緒き満月のつそりと
列柱に楽興るとき楓散る
象の頭をかたどる雲や熊手市
ポインセチア百鉢積みて聖樹とす
枯蝟螂の侮りがたしロダンの忌

四季と折り合つ

佐藤 映二

この五月の記念対談にお招きするゲストの第一人、アーサー・ピナードさんの『ドームがたり』（スズキ・コージ画、玉川大学出版部）を読んだ。
広島を訪れた作者が「原爆ドーム前」という電車の停留所に降り立ち、ふとドーム君のつぶやきを聞く。「広島の人ばくのことを単にドームと呼ぶから、〈原爆〉は自分の姓なのだろうか」と。話は、一九一五年竣工の広島県物産陳列館がチェコ人の設計家によるものだったという、ドーム君の生い

立ちから始まるが、八月六日の悲惨な場面は壮絶を極める。

「ウランのつぶつぶをぼくのうえでわったんだ」

「ぼくのむねのクマゼミもころされた」

終戦後の復興の槌音をうれしく聞く一方で、同じ核分裂の威力を当てにする原子力発電の売り込みの声にも敏感なドーム君。自分の頭部に毎年巣づくりをする雀たちを迎える喜びの一方で、生まれてくる子雀たちに、残存する放射能を気づかうドーム君など、核世界の厳しい現実を生き抜く物語。
「ぼくは生き物がそばにいたうれしい」という言葉で、絵本は結ばれる。ぜひ一度、図書館で手にとってほしい。